

もの言う牧師のエッセー 第187話

「王将」

将棋界注目の中、福岡市で行なわれた第73期名人戦七番勝負は、羽生善治名人が名人初挑戦の行方尚史八段を4勝1敗で圧倒、羽生将棋の強さを見せつけた。

歌謡曲や映画「王将」のモデルで、明治から大正にかけて活躍した関西屈指の棋士であった坂田三吉は、歴史的対局での2度の“端歩突き(はしふづき)”で有名である。これは左右の一番端っこの歩を動かすことで、序盤でのそれは一手無駄にする非常識な手とされたが、彼はこれを後手番だった天下注視の対局で最初から指し、続く対局では反対側の端歩を突いた。関西棋士の東京への意地を示したとされるが、共に勝負には敗れた。弟子から「なぜ端歩を？」と問われて彼が答えたのが、「今にわかる」だったそう。

さて、あれから70年。羽生名人の著書「大局観」によれば、平成の将棋界では序盤での端歩突きが公式戦に登場するようになり、今や一つの作戦として認知され、最上とされる方法になりつつあるらしい。ようやく将棋界は大局を直感的につかむ坂田に追いついたのか。

理化学研究所の調べによれば、将棋の盤面を見る棋士の脳の活動は、攻めるか守るかの直感的な戦略決定と、具体的な次の一手の決定とは、脳の別々の部位の働きによるもので、うち戦略的決定は脳中央にある帯状皮質の後部で“攻め”を、前部で“守り”の評価をし、双方の評価は脳前部にある前頭前野の一部で比較され攻守が決められるという。まさに大局を読み独創的決断を生む脳のネットワークだが、要するに目の前のことだけやっておったのではアカンということだ。

実は、1600年に渡って書かれ、2000ページに及ぶ大書である聖書にはその“読み方”がある。ズバリ“全体を読む”ということだ。それは、十字架にかけられ殺された後によみがえったイエスが、

「モーセ及び全ての預言者から始めて、聖書全体の中で、

ご自分について書いてある事柄を彼らに説き明かされた。」ルカの福音書 24章 27節、

とおりである。聖書をパッと開いて出て来た所だけを読む“おみくじ読者”や、洗礼を受けた後に信仰を捨ててしまう人は多い。目の前のことに追われ、なかなか好転しない日々を苛立ち

をつのらせることも少なくない。だが、やがて帰って来られ、信じる者全てに勝利を下さるイエスを大局的に待つことこそが真にキリストを信じる者の道である。イエスは今日も聖霊を通して語りかける。「今にわかる」と。

2015-6-10

